農業大学生によるリレー寄稿文

# 農業との出会い、そして

秋田県立大学大学院　生物資源科学研究科　修士1年
土壌環境学研究室
塚越　圭

私は静岡県出身で、高校を卒業するまで農業とは縁もゆかりもない環境で育ちました。生物に興味があったことと高校の先生の勧めもあり秋田の大学に行くことに決め、同時に大潟村にある学生寮に入ることにしました。この選択が私を農業と出会わせ、そして人生に大きな影響をあたえることになりました。

八郎潟を干拓してできた大潟村は、１枚の圃場が1.25 haもあり、水稲を中心とした大規模な農業が行われている農村です。そのため、寮に住む学生は“良い労働力”であり、農繁期にはアルバイトとして多くの学生が駆り出されます。この農業アルバイト(略して「農バイ」)こそが、まさしく私を農業と出会わせてくれた存在です。私は学部１年生のときから、この「農バイ」でさまざまな作業を経験させてもらいました。例えば、田植えの手伝いや畦の除草などの水田仕事から、タマネギの収穫やエダマメの選別などの畑仕事まで、本当にたくさんの作業をやらせてもらいました。そのなかでも、ある農家さんのところで「フェラーリに乗せてあげるよ」と言われ、どでかい６条コンバインに乗せられ、１週間稲刈りをし続けたことが一番の思い出になっています。

「農バイ」でさまざまな作業を経験した塚越さん

こうして私は「農バイ」を通して農業を肌で感じて「農業ってこんなに楽しいんだ！」と思い、農業についてもっと知りたいという気持ちから今の研究室を選びました。私の研究室は「作物生産と環境保全が両立する農業技術体系の確立」をモットーに、試験場や農家圃場を主なフィールドとして、現場に密着した研究を展開しています。具体的な私の研究内容は、ダイズの多収を目的としたもので、大潟村の農家圃場において栽培試験を行っています。

大学院に進学した後も「農バイ」をやりつつ、
日々研究室で勉強している塚越さん

農業に心を奪われてしまった私は、大学院に進学した今でも寮に住み続け、早朝や休日に「農バイ」をやりつつ、日々研究室で勉強しています。大潟村で生活し、多くの農家さんと交流するなかで、農家さん同士、または農家さんと消費者とのつながりの強さや広がりを知り、農業とは単なる作物生産ではなく、人と人をつなげる営みであると考えるようになりました。私はそこが農業の魅力だと感じます。私は将来、秋田県で経験したことや学んだことを活かして、日本農業の発展に貢献していきたいと思っています。